



「アンスガル伝」について：  
ヴァイキング時代初期の歴史地理的資料

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-12-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚田, 秀雄 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00006260">https://doi.org/10.24729/00006260</a>

# 「アンスガル伝」について

## — ヴァイキング時代初期の歴史地理的資料 —

塚 田 秀 雄

### 1. はじめに

VITA ANSGARII<sup>(1)</sup>「アンスガル伝」は、ハンブルグの大司教であり、北欧への布教につくしたアンスガル(801-865)の生涯について、彼の後継者であったリンベルトが、カソリックの立場から記したものである。その内容は大部分がアンスガルの宗教者としての活動に割かれているが、ヴァイキング時代の北欧、それとカソリック世界との関係について触れているところがある。筆者が別稿で考察したブレーメンのアダム「ハンブルグ大司教列伝」中の、「北欧諸島誌」と題する巻は、専らデンマークやスウェーデン南部の地誌を志したものであり、<sup>(2)</sup> 従って、歴史あるいは歴史地理的資料として「アンスガル伝」を見るならば、「北欧諸島誌」と比べて、その密度ないし史料の価値が云々されることもあり、ヴァイキング時代の史料としての評価は区々である。<sup>(3)</sup> しかし、この両史料の差は、むしろ異なる文化圏の間の交渉の、時代の差が表現されているものと考えべきで、9世紀後半と11世紀のほぼ200年の両文化圏の交渉の密度、従って史料の質・量の差が、「アンスガル伝」の評価を低めるものであるはずがない。ヴァイキング世界特にその交易都市ビルカについての外部からの最初の報告として、内容もさることながら、その地名が記載されたこと自体が重要な意味を持つものと考えべきである。

「北欧諸島誌」は当然、ハンブルグ大司教区創設時の初代大司教であったアンスガルについて最大の紙数を費やしているが、アンスガルの周辺の記述については、多くを「アンスガル伝」に依存していることは明らかである。<sup>(4)</sup>

「アンスガル伝」が9世紀の北欧についての重要な記録とする一般的な認識があり、多々引用されているにも拘らず、<sup>(5)</sup> その具体的な記述については、ほとんど検討されていないので、本稿では、地域資料として、この書物が伝える事柄を正確に紹介し、そこから読み取れるものとその限界を考察する。<sup>(6)</sup>

### 2. 時代の状況とアンスガル

ヴァイキング時代は、793年に、デンマーク系ヴァイキングが北部イングランドのリンディスファーン島に襲来したことによって始まった。一方、カロリング朝フランクのカルルは799年までにザクセンを征服し、800年には神聖ローマ帝国皇帝となっている。同年、統一が進みつつあったヴァイキング時代のデンマークでは、ゴットフリー王が即位している。このことは、9世紀初頭に、キリスト教圏と異教の北方圏が、それぞれ統一的権力の下で直接国境を接する

ことを意味した。当然、両者の間には、対立があり、国境画定の条約も成立したが、政治権力としての両者の関係は極めて不安定なものであった。<sup>(7)</sup> デーン人の側は当時の重要都市ヘデビーとアイダー支流のテーネ川の間にはダーネヴィルケの防塁を築いている。<sup>(8)</sup>

814年のカール大帝の死とルートヴィッヒの即位、840年のルートヴィッヒの死と843年のヴェルダン条約によるカロリング帝国の分割、ロタリングアの成立はいずれも、アンスガルの生きた時代のことである。

「アンスガル伝」に記されているごとく、当時、エルベ川以北については、まだ教会制度の中での組織化が完了していない、両勢力の間の緩衝的地域あるいは紛争地域であったと考えられ、西欧全域へのヴァイキングの侵襲が盛んな時代の、カトリック側からの進出拠点がハンブルグであった。

アンスガルは801年に生まれたとされるが、「アンスガル伝」は幼少年時代の具体的事実を明らかにしない。フランスのコルビーでドミニカン派の修道僧であったが、カール大帝以来の周辺地域の教化政策の一環として、823年に新しい修道院設立と共に、ザグセン、ウェーザー河畔の現ヘクスターに派遣された。新コルビーともコルヴェイとも呼ばれた。826年にはデンマークへ、829年にはスウェーデン系ヴァイキングの都、ビルカを布教のために訪れている。831年には、新設のハンブルグ大司教区の司教に任ぜられたが、その後、ハンブルグはヴァイキングの侵襲を受け、破壊された。848年には、ハンブルグ・ブレーメン統一大司教区が成立し、アンスガルはその大司教に任命されている。彼は865年に死去したが、その後を継いだのが、「アンスガル伝」の著者、リンベルトである。<sup>(9)</sup>

以上により、「アンスガル伝」が、北欧の最初の伝道者とされるキリスト教側の重要人物の伝記であり、当時の北欧地域の地理的記載を目的としたものでないことは明らかであるから、これを資料として利用するにあたっては、通常の史料批判はもちろん、特にキリスト教と異教という関係での記述が客観性を欠く可能性については、承知していなければならない。しかし、逆に言えば、この関係以外での記述はむしろ作為を含まない可能性が高いとも言い得るのである。

### 3. 記載地名と記述内容

**記載地名** 「アンスガル伝」に記載されている地名は図に示すのみである（図1）。北欧地域では、ヴァイキング都市であるシュレスヴィヒ、リーベ、ビルカに言及しているが、リーベについては具体的な記述を欠いている。その他のバルト地域でアプリアとセーブルクの二都市についての記述があるが、数少ない都市の断片的な記述に留まっており、全体として地域の概念は希薄である。もちろん、農村の生活等について具体的な記述を行う必要もなかったのであるが、具体的な地域情報が狭い領域に限られるのは、単なる情報の不足ではなく、著者リンベルトの関心が、聖職者の伝記にあったのであるから、いたしかたないであろう。

リンベルトの原典では Dani, Sueones, Slavi としている民族の呼称を、参照したスウェーデン語訳では、デンマーク人、スウェーデン人、スラヴ人としている。これらのラテン語によ



図1 「アンスガル伝」に記載された地名

る呼称は一部はタキツス<sup>(10)</sup>を継承しているが、タキツスの場合には、現在のデンマークにしてもスウェーデンにしても、キンブリー=Cimbri など複数の部族を挙げており、同時にスイオネースなど民族名とも考えられる統一的な呼称を用いていたのに対し、リンベルトの場合、部族ではなく民族の呼称として統一的に用いている。<sup>(11)</sup>これはヴァイキング社会が次第に現在の国の領域に近くまとまりつつあったことを反映していると考えられる。統一の主体となった部族の土地という形でこの領域を表現しているのである。

北欧地域の地名の記載が僅かなのに比べると、フランク王国の領域の都市については、かなりの言及がある。大部分はカソリック教会とアンスガルの活動に関連した記事であるのは当然であり、特に歴史または地理学の資料としての重要性は認められないが、ハンブルグについての記述には、辺境に建設されたフランク王国側の進出拠点としての性格を立証するものがあり、これと関連して異教徒=ヴァイキングとの接触の状況が記されている。

**記載内容** フランク王国とその北進に神経をとがらせるデンマークの関係が不安定であったことは既に述べたが、両政治権力の対立と平行して、ダーネヴィルケで隔てられた南北の地方が、かなりの平和的交流を持っていたことが「アンスガル伝」の記載で知られる。これは公的な使節であったり、政治的亡命であったり、商人であったりするが、商品の貿易関係や北方に向かう商人の船がシュレスヴィッヒ<sup>(12)</sup>から出ることが記録され、交易関係が確立していたことが示唆されている。いうまでもなく、現在までに発掘調査されたヴァイキング都市の考古学的研究結果とこの記載内容は一致する。

政治的動向についてはリンベルトは強い関心を示しており、ヴァイキング国家内部の政治情勢についてもフランク王国側の情勢についても、かなりの情報が得られる。特にヴァイキング国家内部の支配者の離合集散についての記述は、<sup>(13)</sup>他の証拠による補強は得られないが、信頼度は高いと考えられる。このような政治的関心の大きさは、アンスガルやリンベルトが使命とした北方への布教活動の成否に関係するからであろう。安定した政治権力の援助が彼らの活動に不可欠であったからである。

ヴァイキング行についての具体的な記載も、<sup>(12)</sup>このようなヴァイキング勢力内の政治情勢あるいは権力抗争としての認識によるものとカソリック世界に対する敵対行為としての認識によるものがあり、共に掠奪行為を伴っている。クールランドにおけるデンマーク系とスウェーデン系の抗争は経済的利益を求めたものごとく記載されているが、前後の記述からするならば、これは短期的な掠奪もさることながらそれ以上に長期的なバルト地域の支配権をめぐる抗争であったことが示唆されていると理解できる。ハンブルクの掠奪についての記載も、フランク王国とデンマークの両勢力の緩衝地帯へのフランク側の進出が背景にあることが示されている。いずれにしても、当時のヴァイキング国家の領域とその周辺部で起こった現象について具体的な報告を行っているのであるが、筆者自身が必ずしも意図しなかった情報すなわち伝えるつもりがなかった情報が全体の構造から読み取られるのである。

ドイツ側でいうヴァイキング都市のシュレスヴィッヒは現在、ヘデビー Hedeby と言われる都市遺跡を指している。シュレスヴィッヒは商業活動が盛んであったとされるが、フランク王国に近接する土地に発達した都市であるという認識があり、地理的重要性の把握もこの都市

については十分で、もっとも地理的感覚が発揮された部分である。都市としての記述は総合的であると同時に、フランク王国とデンマークさらにはヴァイキング世界との交渉の要であることを記述している（図2）。

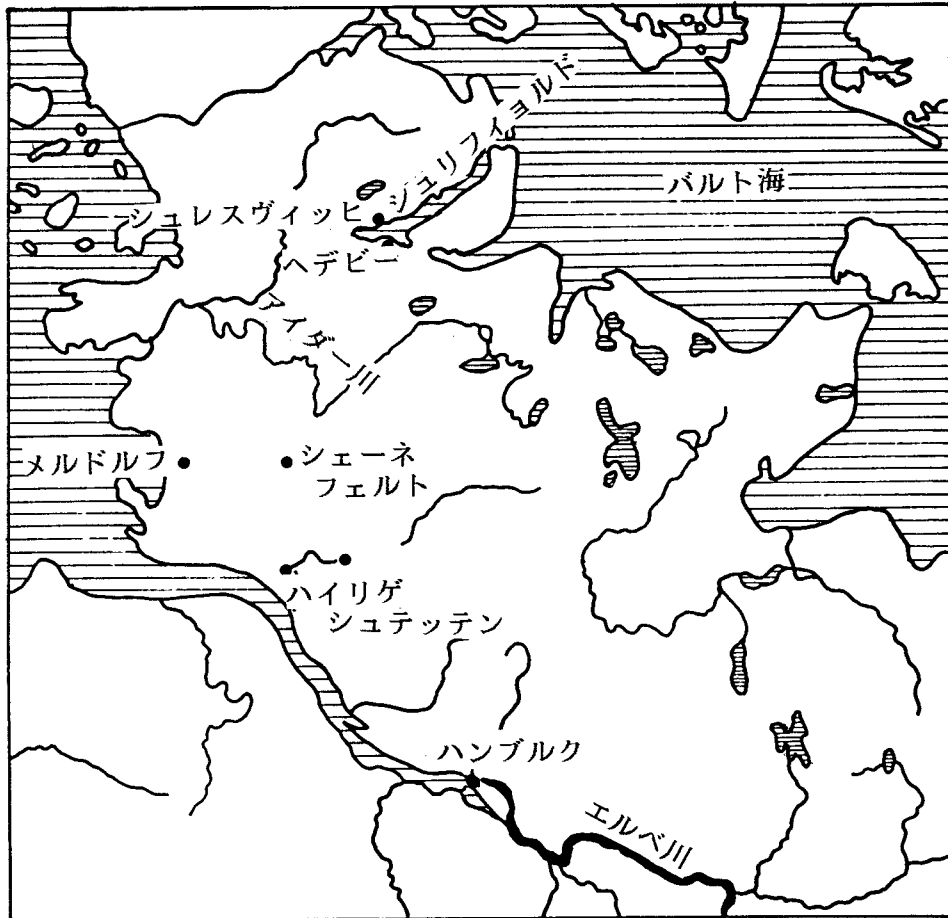


図2 デンマークとドイツの境界地帯

ハンブルクについての記載<sup>(15)</sup>は、布教の前線基地としての大司教座としての選定理由を明示しているが、これは聖職者側の理解であって、エルベ以北の異教の土地への入植と版図の拡大という世俗的な意味についての関心は薄かったものようである。ハンブルクについては、別に多くの資料があるから、「アンスガル伝」は特に重要な文献とは言えないであろう。

「アンスガル伝」がもっとも価値を有するのは、いずれの歴史書も引用するビルカについての記述である。<sup>(16)</sup>アンスガルの布教活動、市民の集会の様様についての臨場感豊かな記述があり、商業的繁栄、政治的抗争など時代の状況についても明確な記述を行っている。

歴史地理的な資料としては、シュレスヴィッヒからの行程について、「アンスガル伝」では珍しい記載があり、二地点間の所要日数と通過経路についての不完全な記録となっている。

例えば、現在のビルカの遺跡研究<sup>(17)</sup>から明らかな、住民の居住区と防御拠点としての城塞の位置関係や機能区分についての記述<sup>(18)</sup>が、このビルカについての他の記載の信頼度も高めているのである。これについてはより詳細な検討が必要であろう。

#### 4. 資料・記載の内容

**各章の内容** 「アンスガル伝」の内容の概略を示すために、42章の内容を示す。

1. 序
2. アンスガルの幼年時代
3. アンスガルの青年時代
4. アンスガルのコルビーでの教師時代
5. フルベルトの死
6. アンスガルはニーコルビーへ
7. アンスガルとアウトベルトはデンマークへ
8. デンマークでの活動、アウトベルトの死
9. アンスガルのスウェーデンへの伝道の使命
10. ウィトマール・スウェーデンへの最初の旅行
11. ビルカ到着・ヘイゲイル
12. アンスガルは大司教になる
13. 教皇の承認
14. ガウトベルトがスウェーデンでの副司教に
15. 大司教としてのアンスガル
16. ハンブルグの破壊
17. ニタルスの殉教・ガウトベルトの死
18. スウェーデン人の受けた罰
19. アースンド王のビルカ征服の試み
20. 敬虔なフリーデポリ
21. ルートヴィヒ王死後の状況
22. アンスガルがプレーメンの司教に
23. 教皇の承認
24. ホーリック王の改宗・シュレスヴィッヒでの活動
25. アンスガルのスウェーデン旅行の熱意
26. スウェーデンへの二度目の旅行
27. 民会がアンスガルの活動を承認
28. 活動の組織化・アンスガルの帰国
29. スウェーデン旅行前のキリスト幻視
30. スウェーデン人とクール人
31. ホーリック王死後の状況
32. デンマークでの活動の保証
33. アンスフリード、レギンベルト、リンベルトがスウェーデンへ
34. アンスガルの事績
35. アンスガルの人物
36. 幻視
37. 牧師としてのアンスガル・その能力の現れ
38. アンスガルが奴隷を解放する
39. アンスガルの能力の別の現れ
40. アンスガルの病氣
41. アンスガルの死
42. 結語

内容をおおまかに区分すれば、以下のようにまとめることができる。<sup>(19)</sup>(1)序と結語(1,42章)、(2)アンスガルの青年期(2-5章)、(3)アンスガルの事績(6-34章)、(4)アンスガルの生活(35-39章)、(5)アンスガルの病氣と死(40-41章)。歴史地理的資料として重要なのは、アンスガルの事績とし得る部分に集中しているが、38章のアンスガルによる奴隷の解放についての記事などは、看過し得ない内容を持つ。

**資料・地名と記載内容** 以下に北欧に関する地域資料となり得る地名についての記載を列举する。ここに挙げるのは資料として重要な部分のみの抜粋であるが、筆者の判断により、ほとんど全文を訳した章もあれば、大部分を省略した章もある。ただし、以下に訳文を挙げた部分については、原文に忠実な日本語訳とするように努めることで、章を示した上で引用可能となるようにした。

また、原典の章を( )内に示した。地名ごとにまとめたが、複数の地名に関係することがらについては、記載の重複を避けるために、一か所にまとめ、その章と記載した地域名で参照箇所を示した。

## デンマーク・スウェーデン全般

(7章) ハンブルグ等の項参照

(9章)

- 「スウェーデン人からの使節がルートヴィッヒ皇帝の下に着いた。この使節は偉大な皇帝へのメッセージと共に、スウェーデン人の間にキリスト教に改宗したいと願う者が多いことを伝えた・・・」

(13章)

- 「・・・レンの司教エボは異教徒特にデンマーク人の改宗に法悦を燃やしていた。彼はデンマーク人を皇帝の宮殿でしばしば眼にしていたが、彼らが、異教に囚われていることを悲しんでいた」

(19章) ビルカの項参照

(24章) シュレスヴィッヒの項参照

(25章)

- 「(アンスガルは) 良い友人であった(デンマーク王) ホーリックに、彼の援助で、スウェーデンを訪問できるように依頼した。ホーリック王は、スウェーデン王ウーロフへの個人的メッセージを送った・・・ウーロフ王が自分と同様に、アンスガルが望んだ、その国内でキリスト教が確立することを許されたいと依頼した」

(27章)

- 「ビルカの町で開かれた民会の当日になると、王は彼らの習慣に従い、民衆の前で、アンスガルと彼らの一行の仕事の進行について大声で告知せしめた。人々は・・・口々に大声で、違った意見を述べ始めた」
- 「王は国内の別の地方で開かれる民会で、もう一度その住民にこの件を提案するまでは、最終的な許可を与えられないと言い、・・・その当日、集会で王の代理人がアンスガルの使命、先の民会で言われたこと、なされたことを全て告知し、・・・彼等は先の民会の結論を全会一致で承認することで合意し、彼らはこの件について、完全に支持すると宣言した」

## ビルカ

(11章)

- 「・・・彼らは非常な困難に耐えて、長い距離を徒歩で進み、途上の水路などは、小船を利用した。遂に彼らはビルカと呼ばれるスウェーデンの港町に到着した・・・ビョルンという名の王の歓迎を受け、・・・王は部下と討議した後、全員の賛同を得て、彼らが滞在し、キリストの福音について説教することを許した。・・・その地に囚われていた多くのキリスト教徒が列席し・・・ビルカの町の長であったヘルゲイルは自分の土地に教会を建て、神に奉仕した・・・」

(19章)

- 「・・・ほぼ同じ頃に、アーヌンドという名のスウェーデン王が自分の国から追放され、デンマークに亡命していた。彼は自分の国を再征服しようと考えており、そのために、デンマーク人の助けを求めようとしていた。もし彼らが、アーヌンドに従うならば、多額の報償を得



られるだろうと告げ、ビルカの町には多くの豊かな商人がいたし、あらゆる種類の商品や多くの金と貴重品が溢れていたのので、彼はそこをデンマーク人に与えようとした。ビルカの都市に対しては、アーヌンドは、軍事的損失なしに必要な物全てを享受できるように、それらの物を運んでくると約束した。デンマーク人たちは、約束された報償に喜び、貴重品の徴発を考えて夢中になった。そして、デンマーク人は彼を援助するために、21隻の船に兵士を積み、彼を乗せて出航した。その他に彼は11隻の自分の船を持っていた。デンマークを離れた彼は急いでビルカにやってきた。スウェーデン人の王はたまたま遠くへ出掛けており、騎士たちと民衆の呼び集めは間に合わなかった。その場所の武将であったヘルゲイルのみが商人や残っていた民衆と共にいた。この危機にあって、彼らは近くにあった城に逃げ込んだ。・ ・ ・ ・ ・ しかし、城は特に強くはなかったし、彼らも自らを守るには数が少な過ぎたので、攻撃者に使者を送り、平和と同盟を請うた。アーヌンド王は都市の身代金として銀100ポンドを支払えと通告した。この条件で彼らは平和を得るはずであり、直ちに要請された金額を送り、王は支払いを受けた。

しかし、デンマーク人たちは、この額が彼らの計画したところに達していないので、この合意に不満足であり、代わりに彼らはスウェーデン人に対し、突然攻撃を仕掛け、都市を破壊し、灰塵に帰せしめた。・ ・ ・ ・ ・ 都市に住む者が逃げ込んだ城を破壊する準備が整った。これらの者も事態を認識した。・ ・ ・ ・ ・ ヘルゲイルは彼らのところへ急ぎ、話し始めた。『・ ・ ・ ・ ・ お前たちは100ポンドの銀を与えてしまった。それがお前たちに何の役にたったのか。今、彼らは襲来してお前たちが所有する物を全て破壊する。お前たちの妻も子供も囚人として捉えて行く。城にも町にも彼らは火を放つだろう。お前たちは刀の錆になるだろう。それでもまだお前たちの偶像が役に立つというのか』・ ・ ・ ・ ・ デンマーク人は、金を得るためには何処へ行けばいいのかと訊ねた。占いが判断を下し、彼らは遠く離れたスラブの土地の都市へ行くべしとした。デンマーク人は今や、これが彼らにたいする神の命令であると信じ、その場所を出発して、別の都市へと急いだ。彼らは、平和に、静かに暮らしていた住民に落雷をもたらし、この都市を武力で占領し、多くの掠奪品と宝を奪った後、帰郷した。しかし、スウェーデン人を掠奪するために来たはずのアーヌンド王は彼らと平和を築き、彼らから得たばかりの金を返還させた。そして、彼らと和解するために一時、彼らの下に留まった。』

(26章)

- ・ 「・ ・ ・ ・ ・ (滞在していたデンマークから) アンスガルはその旅を開始し、約20日の航海の後、ビルカに到着した。・ ・ ・ ・ ・ (キリスト教の布教に関連して) 全ての公的な事柄は、王の専制的な言葉よりも、民衆の一致した意思によって決定されるというのが彼らの習慣である。・ ・ ・ ・ ・ 」

(27章) デンマーク・スウェーデン全般の項参照

(28章)

- ・ 「王はアンスガルを呼んで、経過を告げ、全員の一致した意思に支持されて、教会を建設して僧を置くこと、民衆は誰でも・ ・ ・ ・ ・ キリスト教徒になれることを伝えた。・ ・ ・ ・ ・ 王はまた、教会を建設するための敷地を彼に与え、アンスガルは僧のために、別の敷地と家屋を購入し

た。……アンスガルは帰途についた。」

シュレスヴィッヒ リーベ

(24章)

- 「アンスガルはブレーメンの司教管区に着任しても、デンマーク人の教化に熱意を燃やした。……当時、デンマークの唯一の王であったホーリックをしばしば訪問した。国内での布教の許可を得るために、贈り物、サービスで好感を得るべく……アンスガルは王の使者として、何度もホーリックの下へ送られる。両国間の平和条約締結のために熱心かつ誠実に働いた。ホーリックが次第に理解を示し、……顧問としてアンスガルを信頼し、……ザクセンとデンマークの間の条約締結もアンスガルの保証を重視した。……アンスガルが王の友人として接する内に、キリスト教徒となることで相談を受けた……あらゆる地方から商人が訪れ、我が国に近く目的に適したシュレスヴィッヒという港町に、キリスト教会を建設させた。彼は更に、僧の住地として、ある場所を示し、国内で誰でも望む者はキリスト教徒になることを許可した。デンマークには、既に、ドレスタードやハンブルクで洗礼を受けたキリスト教徒が数多く居住し、市の中心的な人物も何人か含まれていた。……以前は不可能であったのが、我が国の人間も何の恐れもなく、自由にこの地を訪れることができることを喜んだ。商人たちは、ドレスタードからと同様に、我が国からもやって来るのである。これにより、シュレスヴィッヒにはあらゆる商品が豊富になった。……洗礼を受けた者の多くは、その後もこの地に残ったが、こちらに移住する者も多かった。」

(31章)

- 「……ホーリック王が海賊と自分の一族が彼の国に侵入しようとした戦いで戦死した……息子のホーリックジュニアに対し、キリスト教信仰の壊滅を熱心に主張したシュレスヴィッヒの町の支配者・ホヴィがキリスト教会を閉鎖し、全てのキリスト教徒の行事を禁止する命令を出した。この都市にいた僧も暴力的な迫及にあって、ここを立ち退いた。」

(32章)

- 「……ホーリックジュニア王は、シュレスヴィッヒの町の支配者に何ら慈悲を与えず、彼をこの都市から追放した。……ホーリックジュニア王は国内の他の都市、例えば、リーベでも彼はある場所を教会の建設用に示し、僧がそこに滞在することを勅命で許可した。」

(33章)

- 「……レギンベルトが共に旅をする予定であった商人と船が待っているはずの、港町シュレスヴィッヒへの途上にある時、……デンマーク人の路上強盗に待ち伏せされ殺された……」

ハンブルク ブレーメン エルベ ヴェラナオ

(序)

- 「ここにアンスガルの生涯、業績、死についての書が始まる。彼はエルベ以北の民衆のための最初の司教であり、スウェーデン人、デンマーク人、スラヴ人その他の未だ異教の神を信仰する北方に住む人々に教皇が送られた使節であった。」

(7章)

- 「……彼らはケルンからドレスタードとフリースランドを過ぎてデンマーク国境まで来

た。ハラルド王はその当時、彼の国内に安全に滞在することができなかったので、皇帝はエルベの対岸に一州を与え、必要なら、ハラルドがそこで生活できるようにした」

(12章)

- 「皇帝カールが全サクランドを征服し・・・その土地を司教区に区分した時には、その地方のもっとも遠隔の地で、エルベ川以北に位置する地方をどの司教にも割り当てなかった・・・カールの子ルートヴィヒはザクセンのエルベ以遠の土地を二つに区分し、更にこれを二つの司教区に分けた・・・エルベ川の対岸の北部ザクセンのハンブルクの町に大司教座を設定した・・・エルベ川以北の全ての教会はこの大司教座に従うこととなり・・・新しい教区は遠隔の土地にあり、蛮人の犠牲になる危険があり、また極めて小さかったので、皇帝はその教区のために、ガリアに修道院を建設し、これはトゥールーと呼ばれて、常に大司教座のために貢献するものとされた」

(13章)

- 「・・・皇帝はレンの大司教エボに、彼がこの地方を訪れた時にはいつでも支えとなる土地となるように、エルベの対岸のヴェラナオという土地を与えた。彼はしばしばこの地に来て、北方に住む人々の魂をキリスト教に向けるために多くの犠牲を払った・・・」

(14章)

- 「その後、皇帝は、大司教エボの提案により、エボが前述のヴェラナオに避難所として建てた修道院を、アンスガルに与えた。」

(16章)

- 「・・・海賊がハンブルクに襲来して、その船団でこの都市を包囲した・・・最初、城塞都市自体あるいは隣接する商業地内部にいた者の助力で、都市を防衛しようとした。・・・アンスガルは辛うじて避難することができた。僧たちはあらゆる地方に四散し、民衆も都市を離れ、放浪した。大部分は逃げのびたが何人かは囚われ、多くは殺された。敵は城塞都市を征服し、都市に隣接した商業地にあった物は全て掠奪した。・・・教会も修道院も焼け落ちた・・・」

(22章)

- 「・・・近くにあったブレーメンの司教区には、その時偶然に指導者がいなかったため、王はこれをアンスガルに与えることに決定した・・・ハンブルクの司教管区が非常に小さく（洗礼教会が四つしか無かった）何度も蛮人の侵入によって災難を蒙るので、ブレーメンの司教管区を代償として与える・・・」

(38章)

- 「エルベ川以遠の民衆がかつてひどい経験をしていることを黙視できない。何人かの哀れな囚人は海賊によってキリスト教国から異教徒の国に連れ去られ、外国で困難な忍従の生活を強いられたが・・・脱出に成功し、エルベ川以北のキリスト教徒の土地、すなわち、蛮人に最も近く住む住民の土地に来た者たちである。しかし、脱出者がここに来た時、住民はこれを捉えて貴族に引渡したり、再び異教徒に売り渡したり、自分の奴隷にしたり、キリスト教国に奴隷として売った。」

## クールランド セーブルク アプリア

(30章)

- 「スウェーデンから更に遙か東方にクール人と呼ばれる民族が住んでおり、かつてはスウェーデンの支配を受けていた。しかし、ずっと以前に彼らは反乱し、スウェーデン人の優位を受け入れることを拒否してきた。デンマーク人はこれを知って、司教がスウェーデンへ来た時に、大船団を集め、クール人の土地を回復し彼らを支配する目的で船出した。この国には五つの都市があった。・・・彼ら（クール人）はデンマーク軍の半分を倒して勝利し、デンマーク軍の船の半分を奪った。その他に彼らは金銀や多くの戦利品を得た。・・・スウェーデン人はデンマーク人ができなかったことを成し遂げて、名誉を得ようとした。クール人がかつてスウェーデン人にも従属していたということから、強力な軍隊を集めて、クール人の国に派遣した。」
- 「・・・まず、彼らはクールランドのセーブルクと呼ばれる都市を急襲した。そこには、武装兵が7000人いた。スウェーデン人はこの都市を掠奪し、完全に支配し、焼き払った。・・・彼らは船をそこに残して、五日の道のりをアプリアという別の都市に向けて進軍した。この都市には15000の武装兵がいた。・・・」

## 神聖ローマ帝国・ザクセン

(12章) ハンブルク、フレーメン等の項参照

(21章)

- 「ルートヴィッヒ皇帝の死に引き続いて、帝国の分割に伴う大混乱が生じ、・・・トゥール修道院はカール王に属することとなり・・・」

## 旅程・地理関係

(7章) ハンブルクの項参照

(10章)

- 「・・・旅の半ばで海賊に遭遇した・・・この旅に同行していた商人は勇敢に防衛し最初は優勢であったが、最後には彼らも海賊に撃破され、船と積み荷の全てを奪われた。アンスガル自身は命からがら陸地に辿り着き徒歩で逃げのびた。」

(11章) ビルカの項参照

(25章)

- 「スウェーデン人の土地は世界の北の果てにある上に、その土地のほとんどは島から成っている・・・」

(26章)

- 「アンスガルは旅を開始し、約20日の航海の後、ビルカに到着した・・・」

## 5. おわりに

「アンスガル伝」は既に述べたように、時代や地域に焦点を当ててこれを記述しようとしたものではないから、資料としての性格に限界があるのは当然である。しかし、アンスガルの事

績に関する各章は、当時の地域社会の状況を活写しているところが多い。特に、アンスガルが数年を過ごして布教活動に努めたビルカは、スウェーデン系ヴァイキング社会の拠点として重要であったが、そこでの民会の模様は具体的に記述され、その後の北欧関係の資料の伝えるところと一致して、信頼度が高い。また、国内の別の地方で開かれる民会で、もう一度その住民にこの件を提案するまでは・・・（7章）といった、国の政策決定に関する王と民会、地方との関係を示唆する記述も、別の資料<sup>(20)</sup>によっても補強されて、同時代資料としての価値が高い。ビルカについての考古学的研究はこのメーラレン湖に浮かぶ島の上の遺跡が、ヴァイキング時代には、バルト海と可航水路によって直接結ばれた海港であったこと、都市が火災にあったことその他多くの事実を明らかにしており、これは「アンスガル伝」の記述をいずれも証明するものである。<sup>(21)</sup>

シュレスヴィッヒ（ヘデビー）についての記述も、ここが、フランク王国とデンマークの国境の都市として、商業活動の中心、海上交通の拠点として重要な地位をしめたこと、ある意味で国際都市として、多数のキリスト教徒がヴァイキング側の都市であるシュレスヴィッヒに住んでいた等の記述はフロンティアの持つ性質を示して興味深い。

これら二つのヴァイキング都市についての記述が、この書のもっとも価値のある部分であることは間違いない。

ハンブルクがエルベ川の北側に建設された最初のフランクの都市であり、キリスト教布教の拠点となったことは、資料の示すところであるが、ヴァイキングの侵入・掠奪は、ここでは、フランク側の対スラヴ、対デンマークの積極姿勢に対抗する性質を持つもののように推定される。ハンブルクの都市の構造についても、城塞都市の部分と商業区に区分されていたことが示唆されており、ビルカと共通する点があるのは注目される。

「アンスガル伝」は、著者リンベルトの意図とは別に、ヴァイキング時代初期の北欧社会について貴重な情報を提供している。これをまとめれば、各国の内政の状況と外交関係、ヴァイキング都市ビルカとシュレスヴィッヒの社会、ヴァイキング行、バルト海をめぐる覇権争いなどについて報告している。キリスト教社会側からの、キリスト教と異教という視点からの報告がなされているわけであるが、これらの情報を別の視点例えば文化接触の過程、中心と周辺、社会変化の要因、両地域間の交流などの視点から読み代えることも可能である。

フランク側とヴァイキング側の異なる領域という認識は著者も持っていたが、これを具体的な空間の問題としては、ほとんど記載していない。旅程・地理関係として抜粋した記述は極く僅かであり、その意味で「アンスガル伝」が資するところはほとんどない。強いて挙げるならば、シュレスヴィッヒが他の北欧地域との結節点として機能し、ここからビルカまで約20日の航程であったが、陸上に行くコースもあったことが想像される程度である。<sup>(22)</sup>

本稿では、「アンスガル伝」を歴史地理的資料として利用するために、その内容を紹介しながら、どのような分野で利用し得るかを検討した。9世紀にヴァイキング側とフランク側が接触する前線を理解するのに貴重な資料である。

## 註

- (1) 原典はラテン語であるが、筆者が参照したのは、現代スウェーデン語訳である。  
BOKEN OM ANSGARS LIV. PROPRIUS FÖRLAG. STOCKHOLM 1986. では Eva Odelman の訳で、Rimbert: Ansgars liv としている。「リムベルト著・アンスガル伝」を意味している。
- (2) 塚田秀雄：「ブレーメンのアダム〈北欧諸島誌〉について」  
大阪府大紀要 人文・社会編 39 1991年3月  
塚田秀雄：「北欧諸島誌」上・下 人文学論集9・10号、11号 平成3年3月、5年3月
- (3) 例えば、Helen Clarke & Björn Ambrossiani : *Towns in the Viking Age*. p.52.  
Leicester & London, 1991.
- (4) 前掲(2)
- (5) 角田文衛編：『北欧史』pp.50-51
- (6) BOKEN OM ANSGARS LIV. には、VITA ANSGARII の現代スウェーデン語訳と共に、主として聖職者としてのアンスガルについての検討と聖職者列伝の一つとしてのこの書についての論稿が収載されている。参考までに以下に示す。
- ① Carl F. Hallencreutz / Eva Odelman : RIMBERT SOM ÄRKEBISHOP OCH FÖRFATTARE.  
② Anders Ekenberg : "ANSGARS LIV" SOM HELGONBIOGRAFI  
③ Alf Härdelin : ANSGAR SOM MUNK  
④ Carl Fredrik Hallencreutz : RIMBERT, SVERIGE OCH RELIGIONSMÖTET  
⑤ Sven Helander : "ANSGARS LIV" OCH ANSGARSMINNET I SVERIGE
- (7) Jerker Rosen : Svensk Historia. I. pp.92-93.
- (8) N.J.G.Pounds : An Historical Geography of Europe 450BC-AD1330. pp.175-176.
- (9) 前掲(6) Anders Ekenberg の論稿 "ANSGARS LIV" SOM HELGONBIOGRAFI が要約している。
- (10) タキトゥス：ゲルマーニア 田中秀央・泉井久之助訳 岩波文庫 昭和28年
- (11) リンベルトは、スウェーデン、デンマークの住民については、一貫して、Sueones と Dani の語を用いている。しかし、両国民は9世紀の後半に現在と同じ分布を示したわけではない。エルベ川以東の住民は一括して Slavi と呼んでいる。
- (12) 現在のシュレスヴィッヒの町の南側に土塁で囲まれたヘデビー Hedeby の遺跡が残っている。「アンスガル伝」でいうシュレスヴィッヒは、Haitabu と記されたヘデビーを指すと考えられるが、両地区を併せてシュレスヴィッヒと呼んだとも言われる。  
noter till Ansgars liv. 326. 前掲(1) p.101
- (13) 特に19章を参照すること。
- (14) 16,30章に具体的な記述がある。
- (15) 序章、12,16,38章。
- (16) 11,19,27,28章。
- (17) ①前掲(3)。  
② Björn Ambrossiani : Birka on the island of Björkö. Uddevalla, 1991.  
③ Björn Ambrossiani : Birka Vikinga Staden. vol.1. Helsingborg, 1991.
- (18) リンベルトはビルカがアーヌンド王と結んだデンマーク軍の攻撃を受けた際に、住民が避難した場所を一方で、ad civitatem、他方で、in urbem と表現している。二つの語 civitas と urbis について、スウェーデン語訳では共に、borg としているが、訳者は civitas については、教会の特

権が認められている領域と理解するが、 urbis は都市あるいは都市内部の城塞と解釈している。

前掲(17)③などでは市街部分と土塁で囲まれた borg が発掘の結果明らかにされている。

(19)前掲(6)③「聖人伝としての『アンスガル伝』」でも、同様の区分で要約する。

(20)Thing または Ting =民会についての記述は、サガに数多く見られるし、キリスト教化された後の各地方毎の州法にも、民会について規定されている。

塚田秀雄：中世スウェーデンの地方組織と農村社会 人間科学論集13/14合併号

大阪府大、1983. pp.28-33.

(21)前掲(17)③

(22)10,26章。